

身に染みた“稼ぐ”ということ

茨城県・茨城大学教育学部附属中学校 2年 根本 桜樺

「もう無いの？」

「何に使ったの？」

我が家でくり広げられる母との会話だ。小学生のころ、私にはとくに毎月決まったお小遣いというものはない。欲しい物があれば、両親や祖父母へ言えば、たいていの物は手に入った。だからこそ、たまに祖父母からもらうお金の価値を理解することなく、すぐに全額使っていた。

小6の時だ。ジュニエコ（ジュニアエコノミーカレッジ）といわれるイベントに参加する機会があった。ジュニエコでは、地元の企業などが協力し、子供たちだけでお店を開店、仕入れから商品の管理、売り上げまでの全てが自分たちの責任のもとで行われる。株式会社として親を株主とし、プレゼンテーションで納得してもらい、初めて資金が得られる。私たちに与えられる資金は最大でも2万円。そして最終的に売り上げから自分たちの給料や株主への配当を払わなければならない。友人から5人で参加しないかと誘われた時、私はお小遣い欲しさですぐに参加を決めた。今なら待ち受ける困難が想像できるが、その時の私はお金がもらえるということしか頭になかった。

「クレープで良いよ。」

「楽しそうだね。」

さほど考えることなく、私たちはクレープ屋を開店させることにした。クレープを作るのに必要な材料を調べ購入していく。お店である以上、看板やクレープを包む紙、持ち帰る人のための袋も必要。お客様が購入したいと思うような商品や店構えが必要だ。売り値はいくらにするのか。原価が高いのに売り値を安くすれば儲けは少なくなる。しかしプロのお店でもクレープは数百円だ。材料の仕入れもお店によって値段が全く違って来る。いざお店を開店させると、私たちを横目に通り過ぎていく人はたくさんいるが、購入してくれる人はなかなか

現れなかった。立ち止まってくれても恥ずかしくて声が出ない。「いらっしやいませ」の一声も言えない自分たち。どんなにきれいに飾りつけをし、安くしたとしても、お金が発生する場面では相手も慎重になる。10円、20円と値下げ交渉してくるお客様を相手にしていると、今まで気にかけてきたこともなかった1円が、とても価値の高いものだと思えるようになった。

お金を稼ぐことはこんなにも大変なのか……。

私たちが初めて開いたクレープ屋、株式会社スターズの売り上げは1日で約3万円だった。そこから2万円の材料費のほか、株主への配当などを差し引くと、私が手にした給料は900円。朝から夕方まで丸一日働いての給料が900円である。最初は売り上げの多さに喜んだが、そこから支払うべきお金を捻出し、給料を支払うというのは想像していたよりも難しかった。会社としては失敗だったのかもしれない。でも私は、この900円がとても眩^{まぶ}しかった。働いてお金を稼ぐことがこんなにも大変だとは思わなかったが、働いて得られるお金を手にした時の喜びがこれほど嬉しいものだとも思わなかった。お金は自分一人では得られないものだと知ることができた。社会に参加し、その一員として働くことで初めて得られるものだと考えると、毎日、遅くまで仕事をし、何不自由なく生活させてくれる両親はすごいと思った。世の中お金が全てだと言う人がいるが、それはお金があれば何でもできるということではなく、お金を得るための生き方や社会への参加の仕方がお金と大きく関係しているということだと思う。丸一日、私が働いて稼いだお金は900円。今までなら安くて何も買えないと不満だっただろう。しかし、お金の流れを知り、稼ぐことの大変さを体験したことで、私はたとえ1円でも無駄^{うれ}にしてはいけないと強く考えるようになった。お金の扱いに“たった”という言葉は存在しない。あの時の900円は、今でも眩しく、使うことはできない。一生、大切に貯金しておこうと思う。

小学生の時にジュニエコという企画を体験したことで、お金のことについて関心を持ち、使い方を学ぶことができた。毎月のお小遣いを無駄にしないよう、これからもその気持ちを忘れずに生活していきたいと思う。